

地域資源と「観光ボランティアガイド」の関係性 に関する一考察

安 福 恵 美 子

はじめに

近年、地域振興や地域活性化が叫ばれるなか、多くの地域において地域資源の活用が提唱されている。地域資源は、地域に経済的効果をもたらすという視点から地域振興や地域活性化の重要な要素として捉えられているが、その代表的な活用方法が観光資源としての活用である。さまざまな地域において、地域資源を活用した取り組みがみられるなか、「地域」そのものが重要な観光対象として来訪者に呈示される観光形態が注目されている。

本稿では、地域における資源を外来者に呈示することをその主な活動内容とする「観光ボランティアガイド」の活動についてみることによって、「観光ボランティアガイド」の活動が地域資源にどのような関わりを持つのか、その関係性について考察することを目的とする。そのため、まず、全国に広く存在する「観光ボランティアガイド」組織の現況を、公益社団法人日本観光振興協会の資料を基に概観する。そして、静岡県静岡市内で活動するボランティアガイド団体と同県浜松市内で活動する市民団体の活動事例を取り上げ、ガイド活動と地域づくりとの関わり、さらには、ガイドによる案内対象地域内における社会関係についてみることによって、地域資源と「観光ボランティアガイド」の関係性について考察する。

I 観光対象としての地域資源

まず、地域資源について考える際、「地域」とは何か、について考えてみたい。「地域とは、物理的・社会的な空間のまとまりを示す言葉」（藤井 2008：11）という表現は一般的に使用される「地域」を示しているようではあるが、では具体的な「物理的・社会的な空間のまとまり」とはどのような「まとまり」であるのか、その範囲については様々な単位が考えられる。そのため、「地域」は「多義的な言葉」、あるいは、「多様な意味内容を含み込む言葉」（森岡 2008：4-5）⁽¹⁾として示されるように、対象とする「地域」をどのような文脈において捉えるのかによってその範囲が異なる。

このように、「多様性」あるいは「多義性」という表現によって捉えられる「地域」に存在する「地域資源」に対しても、「地域」と同様、さまざまな特徴が考えられる。実際、「地域資源」という言葉は、使用場面が多岐に渡ることから、資源やその形態に対するイメージは個人によって異なる。

文部科学省科学技術・学術審議会における資料において、「地域資源」はつぎのように説明されている⁽²⁾。

「地域資源」についての固まった厳密な定義はないが、その特徴としては次のとおり。

(2) 地域資源と「観光ボランティアガイド」の関係性に関する一考察

①非移転性（地域性）

地域的存在であり、空間的に移転が困難

②有機的連鎖性

地域内の諸地域資源と相互に有機的に連鎖

③非市場性

非移転性という性格から、どこでも供給できるものではなく、非市場的な性格を有するもの

こうした特徴からみて、地域資源は大量生産・大量消費型の資源とはなり得ず、まさに新しいパラダイムの下で積極的に活用されていくべき資源。

また、これらの特徴は、その存在そのものが既に他とは差異化された独自の価値を有することを含意。

このような地域資源の特徴に関する説明は、近年、さまざまな地域においてみられる「地域資源を活かした地域活性化」の動きに呼応する。それは、地域資源は「独自の価値を有するもの」であることから、「活用されるべきもの」であるが、この地域においては「活かしきれていない」ので何とか方策を考えなければならない、という表現等によって示される。なかでも、その動きは、「観光まちづくり」という文脈において頻繁に使用されている。国の観光政策の中で盛んに使われたこの言葉は、多くの場合、地域資源の活用による観光振興を目指したものとして使用されている。

ここで、観光における地域資源の活用という点において、二つの観光開発のプロセスについてみてみたい。観光者（客）が入ることによって環境が破壊される、という言説にもみられるように、観光は自然環境を破壊する大きな要因として捉えられることが多い。このようななかで、1990年代に入ってから、マスツーリズムから持続可能な観光（サステイナブル・ツーリズム）への関心が高まる。地域における環境は、多くの来訪者（観光者（客））を引き付ける観光対象である。地域における環境を維持するということは、その環境が観光対象となる地域における観光活動を維持することである。そのため、環境に配慮

した観光開発が求められるようになる。ここで注目されるのが、観光開発と地域の発展との関わりであり、「外発的」と「内発的」という二つの異なる観光開発の形態である。「外発的観光開発」とは、観光開発の対象となる地域外の企業が主体となる開発形態であり、地域社会の意思とは関わりなしに地域資源の商品化を進める開発を指す。地域社会に対する配慮が行われることなしに開発が進められた結果、地域の貴重な資源が破壊されるなど、観光の負のインパクトを生じさせた。これに対し、「内発的観光開発」とは、地域社会の人々や集団が固有の自然環境や文化遺産を持続的に活用することによって、地域社会の自律的意思に基づいて地域資源の活用を図ることである（安福 2012）。

近年、「内発的観光開発」により地域の資源を掘り起こし、それを地域活性化に活かしていこうという動きが活発化するなか、地域が主体となって行う地域資源の活用として「着地型観光」や「交流型観光」が注目されている。

本稿では、このような観光形態において重要な要素である「観光ボランティアガイド」に焦点を当てる。それは、「地域を代表するボランティアガイド」や、「地域のことは地域の人が一番よく知っている」という表現にもみられるように、地域のボランティアガイドは、多義的な言葉である「地域」、さらには多様な「地域資源」について考察するための一つの切り口になる、と筆者は考えるからである。

では、「観光ボランティアガイド」とはどのような組織であるのか。次章では、「観光ボランティアガイド」組織の現状を概観する。

II 「観光ボランティアガイド」組織の現況

まず、社団法人日本観光協会（2011年4

月より公益社団法人日本観光振興協会)から発行された『地域紹介観光ボランティアガイド運営活動マニュアル』(1999年)に書かれている「観光ボランティアガイド」についてみてみたい。

同書では、「地域の人たちの“もてなしの心”」が強調され、ガイドは「地域の“親善大使”」であると表現されている。そして、ガイド自身が“地域の良さ”に対して自信を持つことで、その誇りが地域の他の人たちに伝わり、郷土を愛する人たちが増えていく、としてガイド自身にとっては「郷土愛の涵養と生き甲斐づくり」となること、なかでも「新住民」が地域に対する理解をより深める機会となることなどが書かれている。さらには、昨今の観光スタイルの多様化に伴い、地域を訪れる外部の人々が地域の人たちとの“交流”を求める傾向に触れ、ボランティアガイドが地域の人々との“語らいの場”を提供する機会となる、としている(pp. 7-8.)

一般的に「ボランティア」という言葉から、「ボランティアガイド」は「無償」でガイドを行う人、というイメージを持つことが多い。同マニュアルにおいては、ガイドに案内を依頼する人のことが、おもに事業者が使用する「お客様」という言葉によって表現されている一方、「専門知識をお持ちのお客様と接する場合」は「ボランティアならではのスタンスで」として、「知識範囲外の時は、「素人ですので教えて下さい」と聞き手に回することもよいでしょう。」と表現したうえで、あくまでもガイドは「素人」であるというニュアンスで書かれている。しかしながら、同マニュアルでは、「たとえばお客様が歴史家であっても、たとえばその地方の生活、味覚、風習など、その歴史の風土を側面から語れる経験も知識も、やはり地元の人でなければ知りえないことの方が多いのです。むしろ、自ら学びながらも、与えることのできる情報も多いのだと、自信をもつてのぞみたいもので

す。」(p. 65)として、地域のことをよく知っている(はずである)ボランティアガイドが果たす役割について触れている。

では、現在、全国各地で活動を行う「観光ボランティアガイド」組織とはどのようなものであろうか。公益社団法人日本観光振興協会による調査結果「観光ボランティアガイド組織の現況」(2013年1月～3月調査、調査票発送件数1,723件で回収率77.5%)⁽³⁾のなかから、ここにその一部を挙げてみたい。

〈組織・ガイドの数〉

2001年の組織数は633で、ガイド数は16,095人であったが、2012年には組織数は1,643となり、ガイドの数に至っては、42,483人へと増加している。2013年(調査時)におけるガイド人数は39,608人(性別では、男性21,745人、女性16,123人)で、平均年齢は63.5歳である。1組織あたりのガイドの人数は、10人以上20人未満の割合が最も高く(32.2%)、ついで20人以上30人未満(18.7%)、5人以上10人未満(16.5%)となっている。

〈ガイド料金〉

有料で案内を行っている組織は4割弱あり、有料の場合の料金設定の基準については、「ガイド一人あたり」の割合が最も高く、その料金については、1,000円以上2,000円未満が一番多い(33.3%)。そして、つぎに料金設定の割合の高い「お客様一人あたり」では、500円以上1,000円未満の料金設定をする組織が多い(28.4%)⁽⁴⁾⁽⁵⁾。

〈法人格の有無〉

法人格を持つ組織は8%であることから、全体の1割に満たない。

〈案内実績〉

年間1,000人以上から3,000人の組織が一番多く(23.5%)、ついで100人以上から500人

未満の組織（20.3%）となっているが、案内対象者数が一番多い30,000人以上の組織は5.1%である。

〈年間収入・支出〉

年間収入は10万円以上50万円未満が全体の37.2%と最も多く、ついで100万円以上500万円未満が15.4%となっている（一番少数ながら、500万円以上が6.7%ある）。収入の主な内容は、会員からの会費、ガイド収入、自治体等からの補助金となっているが、年間収入100万円以上の組織では自治体等からの委託費も増加している。支出の主な内容は、事務費（21.4%）と研修費（20.4%）で、人件費は9.1%となっている。

〈抱えている課題〉

人材育成が最も多く（42.3%）、ついで財源（18.4%）、運営（12.6%）と続く。

〈ガイド以外の活動内容〉

ガイド以外の活動は、ガイド研修（27.1%）、イベント支援業務（20.0%）、小中学生向け地域学習（15.6%）であり、ついで後継者育成活動が9.6%となっている。

日本観光協会は、1996年から2010年までの間、「全国各地のボランティアガイドの立ち上げのきっかけや情報交流の場」として「地域紹介・観光ボランティアガイド全国大会」を開催していたが、2010年の大会をもって終了している。同大会において同協会常務理事は、組織およびガイド数の増加により、「普及・促進という意味において、目的は完全に達成したのではないかと考えています」と発言しているが⁽⁶⁾、全国大会終了の理由は、その数の増加が観光ボランティアガイドの性格・定義を曖昧にさせている、と指摘されている（林他 2012）。

実際、前述の「観光ボランティアガイド組

織の現況」調査結果からも、さまざまな点において組織差がみられる。たとえば、「1組織あたりのガイドの人数」が5人未満と100人以上、さらには、「年間収入」が1万円未満と500万円以上、では組織としてその規模に大きな差があることがわかる。「地域紹介・観光ボランティアガイド全国大会」における「過去の全国大会での議論の概要」⁽⁷⁾には、各地の観光ボランティアガイド団体による発言が載っているが、ここで注目されるのは、やはり組織運営に関する組織差である。たとえば、「業務委託のために法人化」に対しては、「法人格を持つことにより行政とのつながりを持ち、財源措置へ繋げる」、「行政から業務を受託する」など、法人化をメリットと捉える組織がある一方で、「ボランティア活動は自分のできる範囲でやるのが基本」として「無理なく、楽しく」や「自分自身の楽しみとしながら、できることを無理をしないで自分の生き甲斐に通じる活動をするのが大切」という発言もみられる。また、法人化を行ったガイド団体に関する事例研究には、「法人化によって事務局の負担は増え、また内部からは楽しく案内ができればよいと法人化を望まない意見もあり、合意形成には時間を要した」（寺村 2009：9）という報告もみられるなど、ガイド組織運営については組織によって、あるいは組織内においてもさまざまな意見があることが分かる。

「全国観光ボランティアガイド」として紹介されている団体には郷土史研究会や文学グループなども多いが、なかにはガイド活動をあまり行っていないような組織もみられる。たとえば、静岡県静岡市内の某団体紹介にはつぎのような表現がみられる。「……は、現在ボランティアガイドが高齢化しており、又人数も少ない為なかなか、ご希望に合うようにはできません。たまたま合っていれば、という感じです。又、団体としての活動も困難になっています。」⁽⁸⁾

では、「観光ボランティアガイド」と呼ばれている団体は実際どのような活動を行っているのだろうか。つぎに、事例からその活動をみてみたい。

Ⅲ 「観光ボランティアガイド」活動事例

本章では、インターネット上の「全国観光ボランティア」(日本観光振興協会)で検索することができるガイド団体の事例として、静岡県静岡市内で活動する「静岡案内人・駿府ウェイブ」の活動内容についてみてみたい。なお、筆者は同団体のガイドによる案内を受けるとともに、ガイドへの聞き取りを行った⁽⁹⁾。

「静岡案内人・駿府ウェイブ」

〈組織紹介〉

同団体が活動を行う静岡市は、静岡県中部

に位置する政令指定都市(人口709,702人)(2013年10月現在)⁽¹⁰⁾で、同県の県庁所在地であり、葵区、駿河区、清水区の三つの区に分かれている。面積は1,411.93km²であり、全国で5番目に面積が広く、都道府県庁所在地の市としては日本最大である。2003年4月に旧静岡市(当時人口約47万人)と旧清水市(当時人口約24万人)が合併。さらに、2008年11月に由比町(当時人口約9,000人)と合併した(図-1参照)⁽¹¹⁾。

同市においてボランティアガイド活動を行う「静岡案内人・駿府ウェイブ」(以下、「駿府ウェイブ」と呼ぶ)は、1998年に設立された(当初の会員数26名)。その発足は、1991年静岡市観光協会創立60周年記念事業の一つである「ボランティアガイド設立検討事業」を発端としているが、その背景には、NHK大河ドラマ「徳川慶喜」の放映(1998年)や静岡市制110周年を記念として行われ

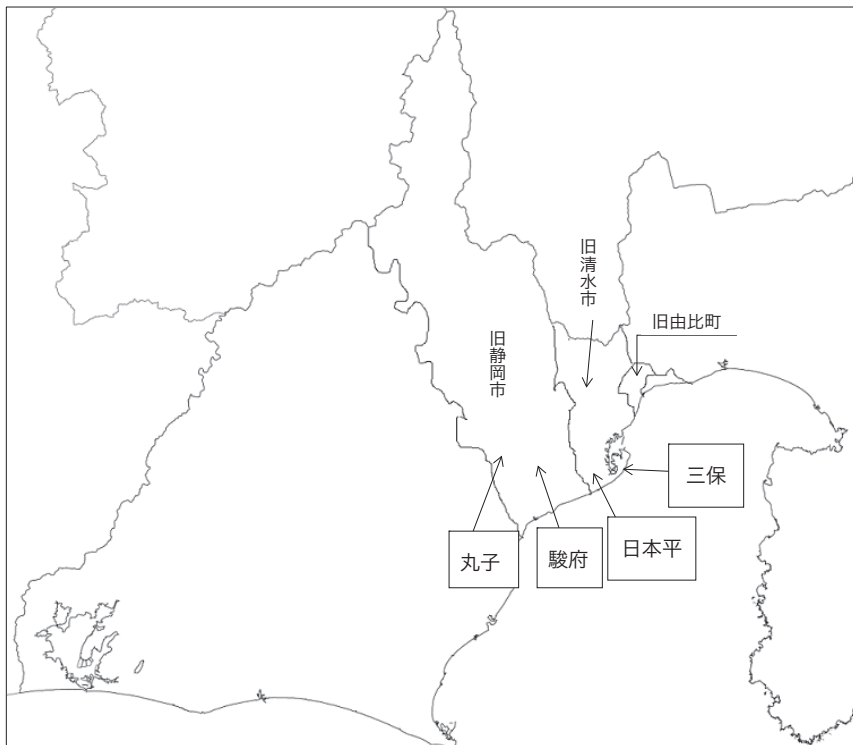


図-1 静岡市合併地図

た「葵博」の開催（2000年）、さらには同年のNHK大河ドラマ「徳川葵三代」の放映による観光への関心の高まりがある。

同団体は、第1期観光ボランティアガイド養成講座の修了生（25名）を会員として発足している。発足当初から静岡市長と歴史学者（元静岡大学教授）が顧問を務め、公益財団法人静岡観光コンベンション協会内に事務所を置く。会員数は2013年7月現在において88名である。同団体の設立10周年を記念して開かれた祝賀会について報じている新聞記事には、「市の観光行政に役立ちたい」⁽¹²⁾という見出しがみられることから、同団体は行政と連携を図っている組織であることがわかる。

同団体のガイドとなるためには、入会申し込み後、養成講座を受講し、その後、面接を受け、会費（6,000円）を支払う、というプロセスを経ることになるが、実際のガイド活動は10か月ほどの養成期間（オン・ザ・ジョブ・トレーニングなど）を経てからとなる（2013年度においては、4月の入会者が翌年1月に実際のガイド活動を開始することとなる）。会員数は、ほぼ一定化している（退会者数と入会者数の関係により）。「駿府ウェイブの歩み・年表」（静岡案内人・駿府ウェイブ『10周年の歩みと回顧』）によれば、これまで毎年、数回の会員研修会（例えば、歴史についての講義など）が開催されてきている。会員は、班（15～16名）ごとで打ち合わせを行うことによって情報を共有し、基本知識以外の常に新しい情報を得ている。同団体の会員は、静岡市で生まれ育った人ばかりでなく、他の地域から転居してきた人も多く含まれている。

〈活動内容〉

同団体のガイドが案内を担当する範囲は、西は安倍川から東はJR由比駅までである。同団体の「ボランティアガイド申込書」の案

内場所の欄には、「静岡の主なる名所旧跡」として、「駿府城址・静岡浅間神社・臨済寺・登呂遺跡・日本平・久能山東照宮・丸子路（吐月峰柴屋寺）・宇津ノ谷峰・三保の松原・梅蔭寺など」と記載されている。

同団体のガイド料は1件当たり1,000円（運営費として）で、10名単位で1人のガイドが付く。ガイド活動の内容は、大きく分類すると4種類である。まず、「企画ウォーク」が挙げられるが、これは同団体による自主企画の史跡散策ウォークである。つぎに、依頼を受けて行う「一般ガイド」がある。このなかには、旅行会社からの依頼で行う現地案内も含まれる。これは、旅行会社が現地における案内をボランティアガイド団体に依頼するケースであるが、そのような依頼で静岡市内の複数の場所を回る場合、担当のガイドはツアー参加者と同じバスに乗って移動する。つぎの「定点ガイド」は静岡市内4か所（駿府城址東御門、静岡浅間神社、日本平と久能山東照宮、丸子）においてガイドが待機し、依頼がある場合案内するものである。そして最後に、小中学生を対象とした活動で、これは市教育委員会からの依頼で行われるものであり、小中学校への出前講座の他に校外学習などの行事における案内の2種類がある。

2012年度における同団体による案内対象者総数は33,992名で、その内訳はつぎのようになっている⁽¹³⁾。企画ウォーク（約2%）、一般ガイド（約26%）、定点ガイド（4か所全体で約60%）、小中学生対象（約12%）。静岡市内における定点ガイド4か所における案内対象者数が全体の約6割という数字から、同団体は静岡市内における主要な観光資源を対象とした案内を中心に行っていることがわかる。

〈ガイドによる案内事例〉

1. ガイド依頼手続き

ガイド依頼申込み手続きから実際の案内は

つぎのように行われる。まず、同団体のホームページ上から申込書をダウンロード後、希望案内地、案内日時、参加人数を記入し、事務所へファックスで申し込む。事務所には交代で会員が常駐しており（土日を除く9:30から15:30まで）、申込みの受付を行い、案内担当者決定への手続きを行う。本調査（2013年8月）にあたり、筆者は、調査時の約2か月前に世界遺産の構成資産として登録された三保の松原（市内清水区）の案内を希望した（参加者5名）。その後、ガイドが決められ、当日案内を担当するガイド本人から電話で直接依頼者（筆者）へ連絡が入り、詳しい打ち合わせ（待ち合わせ場所や時間など）が行われる。今回の案内依頼場所は、三保の松原であることから、当初待ち合わせ場所は三保の松原の駐車場であったが、その後、担当ガイドとの打ち合わせ時、ガイドから、三保の松原を案内する前に、「御穂神社」と「神の道」を訪れることを勧められ、神社の駐車場が待ち合わせ場所となった。待ち合わせの際、ガイドの目印となるのが「駿府ウェイブ」のグリーンの帽子である。

2. ガイドによる案内

案内当日、神社駐車場における挨拶時、まず、ガイドから、筆者達は歴史の専門家かどうかという質問を受けた。これは、案内を受ける側の職業や出身地に合わせて話をしたい、ということのようである。案内の様子はつぎのようであった。最初の案内場所である境内社の「子安神社」にて、ガイドは置かれている穴の開いている「ひしゃく」を見せ、これは赤ん坊が「するり」と出てくる、という願掛けであること等を説明。そして、「御穂神社」での説明後、「神の道」を歩きながら、木道はユウカリの木で作られていることや、松の維持方法などについての説明があった。「神の道」の先にある三保の松原では、先代の羽衣の松（樹齢650年）は、幹約3メートルを残し伐採されたこと、先代の松から



ガイド風景－1（「神の道」にて）



ガイド風景－2（三保の松原にて）

穂木を採取し、接木による二世がエレーヌ碑の前に植えられていることなど、時には、持参したファイルの写真を見せながらの説明であった。また、もっと先へ進んで案内をしたいが、時間の都合はよいかなど、筆者たちの希望を聞きながらの案内であった。

〈案内対象地域と他のガイド団体との関係について〉

先述のように、現在の静岡市は、2003年4月、旧静岡市と旧清水市とが合併することによって誕生し、人口が多い市同士の大型合併であることから、当時「平成の大合併」として注目を浴びた。同団体の会員のなかにも旧清水市在住のガイドがいるが、その割合は全体の1割にも満たない。現在、静岡市におけるボランティアガイド団体は他にもあるが（インターネット上の「全国観光ボランティ

アガイド」では「駿府ウェイブ」の他に4団体の名称がみられる)、同団体が「定点ガイド」として案内を行っている「日本平」は、旧静岡市と旧清水市にまたがっているため、清水区でガイド活動を行う団体と案内地が重なる。現在、清水区には「清水区観光ボランティア連絡会」という組織があり、公民館単位で行われていた生涯学習の受講者が中心となってボランティアガイドの団体が結成されている。旧静岡市と旧清水市においては、行事の実施方法などにおいて違いがみられることがあるが、このような地域性は、ボランティアガイド団体においてもみられる⁽¹⁴⁾。旧静岡市で発足した「駿府ウェイブ」には、広く静岡市から入会するが、清水区のボランティアガイド団体は、公民館における活動を中心に結成されている⁽¹⁵⁾。

旧清水市内にある三保の松原へは、以前から「駿府ウェイブ」の会員による案内が行われてはいたが、その際、先述の「御穂神社」の隣にある「静岡市三保生涯学習交流館」に届けを出していた。しかし、2013年6月に三保の松原が静岡市内では唯一の世界遺産登録地となったことから、同団体が案内する機会が増えたことによって、同年9月以降はその届け出が不要となるなどの変化がみられる。

同団体においては、会員に対して、世界遺産に関する座学研修(「8月会員座学」)を行っているが⁽¹⁶⁾、独自に現地へ赴き、自分が当該地域の案内を依頼されたときのために勉強をする会員もみられる。今後、同団体による三保の松原への案内回数がさらに増すことが予想されるが、実際、世界遺産登録後、旅行会社によって、ボランティアガイドによる三保の松原の案内が組み込まれたツアーへの募集が始まっている。

同団体による年間案内者数(2012年度)は先に示した通りであるが、小中学生を対象とした活動を除いて、同団体会員による案内

を受けた人が静岡市への来訪者数全体のなかでどのくらいの割合を占めるのかを知るのは難しい。それは、静岡市が出している「静岡市観光交流客数」(2012年度は24,867,940人)のなかには市民の数も含まれるからである。しかしながら、同団体は、静岡市内における観光ボランティアガイド団体として一番多くの会員数を持つ組織であり、静岡観光コンベンション協会内に事務所を置いている点や発足の経緯を考えると、行政から重要視されている団体であることがわかる。

同団体の案内対象地である久能山東照宮が国宝として指定され(2010年)、さらには、三保の松原が世界遺産として登録されるなど、案内対象地の観光資源としての重要性がさらに高まるなか、同団体に対する案内依頼が今後一層高まると予想されるが、同団体は、あくまでもボランティアに徹するという考え方であり、会員からはNPO法人申請への要望は出ていない。その大きな理由としては、自由度がなくなるからであるという。

次章では、本章で取り上げた「駿府ウェイブ」のように、案内イコール「無償」というイメージと結びつくようなボランティアガイド団体とは異なる団体のガイド活動を見ることによって、地域資源とガイド活動との関わりについてみてゆきたい。

IV ガイド活動と地域づくり

II章で取り上げた「観光ボランティアガイド組織の現況」にもみられるように、ボランティアガイド団体による案内料金は、組織によってその差が大きいものの、多くの団体がその収入を運営費に充てている。そのため、ボランティアガイド団体の収入は、「自然観察型」や「体験型」ツアーなどの案内を行う、いわゆるプロのガイド組織とは異なる場合が多い。では、地域において活動するガイド団体の活動は、地域活性化とどのような関

わりを持つのであろうか。

ここで、自らの活動を「市民参加型ツーリズム」と位置づけて長崎県西海市でボランティアガイド活動を行う「さいかいガイドの会」⁽¹⁷⁾が使用するガイド養成講座の教材(「始めます!西海型まち歩き観光「まち歩き観光ガイド養成講座」Part1〔観光ガイドと地域活性化〕」)のなかから、つぎのような表現を挙げてみる。

「求められる西海型「まち歩き観光」ガイドの人材像」

「地域資源を活用し、その地域の暮らしの物語を伝えることのできる お客様を満足させることのできる人」

「地域のもつ資源を媒介にしながら、お客様にきちんと地域の想いを伝えることのできる人」

「西海型「まち歩き観光」ガイドに求められる考え方」

「地域の自然・文化・歴史・暮らしについて交流客に理解していただきたい」

「お客様が満足する＝地域に経済効果を!」

ここには、地域資源の活用により着地型旅行商品化を行う、つまり、地域資源の活用をコミュニティビジネスとして事業化することによって、地域づくりを目指すガイド団体の姿勢が示されている。

近年、地域づくりを目指し、地域資源の掘り起こしとその活用を観光ガイド活動と結び付ける市民団体、なかでも特定非営利法人(NPO 法人)による活動が注目される。ちなみに、2012年4月1日以降、法人申請時において「観光の振興を図る活動」が追加された。内閣府データによると、2013年3月31日現在、「特定非営利活動法人の活動分野」の法人数47,542のうち、法人の行う活動の分野(20分野別、複数回答)で、「まちづくりの推進を図る活動」が20,369、そして、「観光の振興を図る活動」が565、となっている⁽¹⁸⁾。

ここで、地域資源を活用した地域づくりに

取り組む NPO 法人団体の例として「NPO 法人奥浜名湖観光まちづくりねっと」(2009年6月に設立)の活動事例をみてみたい⁽¹⁹⁾。同団体は、静岡県浜松市北区の「奥浜名湖エリア」⁽²⁰⁾(図-2 参照)(2013年11月現在人口約5万人)で活動する NPO 法人で、構成会員は、観光関連事業者、地元歴史研究グループ、観光交流ガイド養成講座受講の浜松市民ほかで、個人会員は18名(2013年7月現在)である。同団体の「特定非営利活動法人の活動分野」は、「まちづくりの推進を図る活動」と「農山漁村又は中山間地域の振興を図る活動」、そして「観光の振興を図る活動」である⁽²¹⁾。

同団体はその設立の目的を「地域固有の自然、歴史、文化、特産物など様々な地域資源を掘り起こし、地域内外への情報発信や地域資源の保全と活用を推進する観光まちづくり事業に取り組み、協働による「住んでよし、訪れてよし」の持続可能な地域づくりに寄与することを目的とする」としている⁽²²⁾。その主な活動内容は、地域資源を活かすテーマ

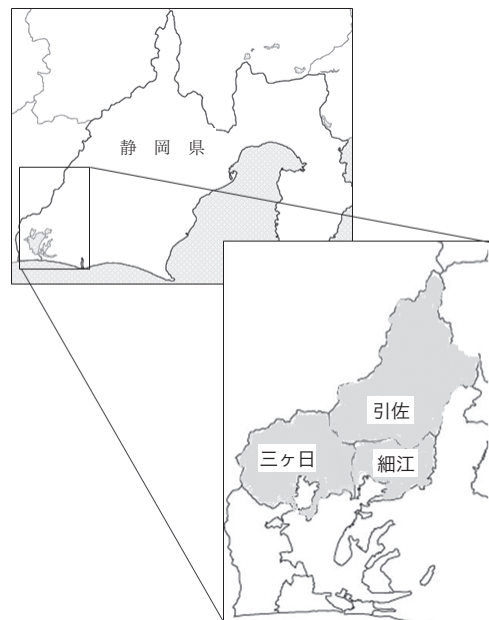


図-2 奥浜名湖エリア地図

性の高い回遊コースづくり（「浜名湖湖北五山めぐり」や「井の国探訪コース」など）、歴史講演会、シンポジウム、交流イベントの開催、人材育成事業（観光交流ガイド養成講座や地元学講座の開催）、観光交流事業として観光交流ガイドの実践（モニターツアー、オプショナルツアー、インパウンド促進ツアー等の企画・運営）であり、2012年5月には同団体の観光交流ガイドメンバーが中心となって「奥浜名湖語り部の会」を設立し、「奥浜名湖観光協会」との協働による着地型観光商品の開発や観光まちづくりの事業活動を展開している。このため、同団体は「語り部の会」（有志グループ）とは別の組織ではあるが、なかには両組織に所属している会員もいる。

同団体の情報は、インターネット上の「全国観光ボランティアガイド」から検索することはできない。「まちづくり」という活動のなかに観光交流ガイドという活動を位置づけている同団体にとって、観光ガイドはあくまでも「まちづくり」のための活動の一環（ガイド活動は全体の活動のなかの1～2割ほど）であることから、ボランティアガイドではないと考える。そして、その活動内容は、会員の地域における人的ネットワークを生かしたガイド活動の特徴とする。たとえば、ツアー参加者を案内するのは、会員が知っている商店街の店や棚田米をつくる場所（同団体は棚田の復元活動を行うグループとの繋がりがある）など、地域に住む人の生活目線に合わせたツアー内容を企画・運営することによって観光業者によるツアー商品と差別化を行っている。そして、ツアー後は、ツアー参加者に対してアンケート調査を行い、その結果を新たな地域資源の活用へと役立てている。

そのため、たとえば旅行会社からオプショナルツアーとして現地案内の依頼を受けた場合、そのツアーを担当するガイドによって案内内容が異なることがある。たとえば、日程

表にない場所であっても、それが地域資源として外来者にアピールされる、とガイドが判断した場合、そこでバスを降りることもある。このように、地域資源をツアー参加者に案内することが「まちづくり」に関わる、と考える同団体の会員は、その報酬が多くなくてもガイド実践の機会として捉え、旅行会社によるガイド依頼を受けており、「有償ではあるが、精神はボランティア」と考えている⁽²³⁾。

ガイド活動を地域の環境保全と結びつけることによって地域づくりを目指す活動は他の地域においてもみられる⁽²⁴⁾。本稿で取り上げた静岡市の「駿府ウェイブ」もその活動を始めるにあたり手本にしたという「NPO法人横浜シティガイド協会」の事例研究（林他 2012）にも「まちづくり」に関わる観光ボランティアガイドの活動が紹介されているが、そこでは、観光ボランティアガイド活動への参加がその他の地域活動への参加に影響を与え、ガイド経験後は他の地域活動への参加が高くなっていることが示されている（林他 2012：105）。また、先述の「地域紹介・観光ボランティアガイド全国大会」における報告には⁽²⁵⁾、ガイド団体による案内地域における町村の合併によって住民の地域資源に対する関心の低さがみられることから、住民に対して地域資源の重要性を知ってもらうための活動を行っていることなどが載せられている。さらに、「相互に意見を出し合い、モデルコースの整備を行う」など、ガイド団体と行政との連携に関する報告もある。ガイド団体と行政との関わりについては、本稿の事例紹介で取り上げた「駿府ウェイブ」がガイド活動を行う静岡市でもこのような傾向がみられる。たとえば、同市では、まち歩きをする来訪者のために、現在は何も面影が残っていないような場所に案内板を設置するなどの取り組みを行っているが、これはガイドが案内しやすい環境づくりとなる。

ガイドによる案内は、いわゆるプロのガイドであっても、ガイド個々人によって異なる場合が多いが、ボランティアガイドにおいては、ガイドと地域資源との個人的な関わりが実際の案内においてより表れやすいという傾向がある。それは、たとえば、町並み歩きなどの場合、その日の担当ガイドによって住民が家の中を見せてくれるときとそうではないときがある、などという場面においてみられる。所属する団体にガイドマニュアルがある場合、ガイドはそれにそった案内をしていたとしても、地域資源に対するガイド個人の直接的関わりを外来者に呈示しやすい環境にある。むしろこのような特性は、いわゆるプロのガイドにもみられることではあるが、ボランティアガイドの場合、ガイドの個人史と地域資源との関わりそのものが「地域」の「売り」となる、つまり、それが外来者に対して「地域」の魅力となる、という特性を持つ⁽²⁶⁾。

来訪者に対して地域資源をどのような立場の人がどのように呈示するのか、という点で外来者の地域に対するイメージは異なる。地域において案内を行うボランティアガイドは、ガイド自身が来訪者にとって地域性を感じる大きな要素となる。そのため、観光交流活動において最も重要な来訪者との対面的接触という「場」において、ガイドが「地域」の「人的資源」として果たす役割は大きい⁽²⁷⁾。そして、地域資源に価値を付加し、その保全にも関わる役割を担うガイド活動は、今後新たな交流型観光形態を構築するための重要な要素として地域活性化へ深く関わる可能性を持つ⁽²⁸⁾。

おわりに

近年、「地域」、つまり、地域の環境（文化も含む）や「人々の暮らしぶり」そのものが観光対象として注目されているが、旅行会社がツアー目的地としての「地域」の案内をボ

ランティアガイド団体に依頼する動きからは、地域の人びとによる地域資源の呈示がツアー商品における重要な要素として捉えられていることがわかる。

地域の資源を外来者に呈示する役割をボランティアガイドに期待するのは観光業界ばかりではなく、観光政策を推進する行政側においても同様である。本稿で取り上げたボランティアガイド団体（「駿府ウエイブ」）の事例にもその傾向がみられた。同団体が案内対象とする三保の松原は、静岡市合併前の旧清水市にあり、合併前はおもに旧清水市のボランティアガイド団体が案内対象としていたところであるが、合併後は地域資源を共有する動きがみられる。その動きは、世界遺産登録地となった三保の松原が、観光資源としてこれまで以上に注目を集めることでガイド需要が高まることによって促進されている。一方、浜松市北区の奥浜名湖エリアを活動地域とする市民団体（「奥浜名湖まちづくりねっと」）の事例では、地域における会員の人的ネットワークを駆使した資源の活用がみられた。

このように、ガイド活動を行う団体の活動内容は多様であることから、地域資源に対する関わりかたは団体によって異なる。しかしながら、多くの場合共通するのは、地域資源を巡るルートづくりやツアー企画・運営など、地域資源に対する価値を付加するための活動を行っていることであり、地域資源が観光資源として変換されるプロセスへの関わりである。

「観光ボランティアガイド」団体の活動は、担当案内範囲が限定されている場合が多い。そのため、その活動は、来訪者との対面的空間、つまり観光空間を限定するとともに、地域資源が存在する「地域」を限定するプロセスにも関わる。しかしながら、なかには、市町村合併によって案内地域が広がる、さらには、ガイド自身が案内地域において生まれ育っていない、あるいは居住していない場合も

みられることから、ガイド活動には「郷土愛」や「帰属意識」という言葉だけでは捉えられない広がりが見られる。

団体によって異なるものの、多くの場合、ガイドは研修（座学を含む）やワークショップを通じて地域資源に対する理解を深めるとともに、認識を共有することによって、地域資源を特定する主体としての役割を担う。その活動は、「世界遺産」、「国宝」、「重要文化財」などの「制度」によって守られていない地域資源が掘り起こされ、価値を付与されるプロセスへの関わりにおいてさらに重要性を持つ。

「観光ボランティアガイド」は、その活動が観光という「場」において地域資源と密接な関わりを持つ。つねに対面的状況において来訪者に対応するガイドは、地域資源を活用する重要な役割を果たすことから、ガイド団体の持続性はその団体が案内対象とする観光資源としての価値にも影響を与える。実際、地域の「人的資源」となるべきガイドの後継者問題を抱えている団体も多い。

来訪者にとって「地域」の代表として捉えられることが多い「観光ボランティアガイド」が、地域資源の呈示や保全に継続的に関わることができるかどうか。そこには、「観光ボランティアガイド」が地域資源を活用するそのプロセスにおける社会関係が大きく関わっている。そして、地域資源とそれを来訪者に呈示する側であるガイドとの関わりは、観光という活動を通して「地域」のイメージ形成に影響を与える。

註

- (1) 森岡は、「この特質に加えて、〈地域〉という言葉は、その指示する空間的領域が、これまた曖昧模糊としているという特質も兼ね備えている。それは、隣近所のきわめて狭い空間から、ご町内という空間を含め、はては市町村を超え、都道府県に相当する広大な空間に至る、これらすべての空間を内包する言葉として用いられている」(p. 5)と述べる。

- (2) 文部科学省科学技術・学術審議会の下に置かれている「資源調査分科会第28回会議（平成23年3月7日開催）」配布資料の一部（「地域資源の活用を通じたゆたかなくにづくりについて」（資料11）p. 7より（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu3/shiryo/1303081.htm）。
- (3) 公益社団法人日本観光振興協会ホームページ「全国観光ボランティアガイド」（http://www.nihon-kankou.or.jp/vg/vg_torikumi.html）「観光ボランティアガイド組織の現況」全国の観光ボランティアガイドを行っている組織（日本観光振興協会が把握している組織に加えて、各都道府県・都道府県観光協会（連盟）・ボランティアガイド協議会等より新たに情報提供を得た組織を対象）として、2013年1月～3月に実施された調査をもとにまとめた数字であるが、「未回答の組織もある」と明記されている。
- (4) この調査結果は、「ガイド料としてではなく、実費（交通費、資料代等）のみを徴収する場合は無料として出されている」、という。
- (5) 社団法人日本観光協会『地域紹介観光ボランティアガイド運営活動マニュアル』においては、「有料か無料かは、そのボランティアガイド組織の根幹に関わる問題であり、これまで何回となく議論が繰返されてきた。」として、その決断をするためのヒントとなる情報の一つとして、「行政や関係団体がどのくらいの援助をボランティアガイド組織に対して提供できるのか」を挙げている（p. 40）。
- (6) 出典は、註(3)と同じ公益社団法人日本観光振興協会ホームページ（「平成22年度渋川伊香保大会」）。
- (7) 出典は、註(3)と同じ公益社団法人日本観光振興協会ホームページ（「過去の全国大会での議論の概要」）。
- (8) 「全国観光ボランティアガイド」「由比ふるさと案内人」（<http://www.nihon-kankou.or.jp/vg/ctrl?evt=ShowBukken&ID=22103aa1042073273> 2013/10/17）。
- (9) ガイド依頼による案内は2013年8月27日に行われた。
- (10) 静岡市ホームページ「静岡市の人口・世帯」（2013年10月公開分）より（http://www.city.shizuoka.jp/deps/kikaku/tokei_hp-jinkou_jyuki_j-index.html）。
- (11) 「静岡市の将来推計人口」（資料3）静岡市（2008年11月）（<http://www.city.shizuoka.jp/000085876.pdf>）。
- (12) 「市観光行政の一助に」静岡新聞（2008年7月4日、地域版）。
- (13) 2011年度においては、案内対象者総数30,053名のうち、企画ウォーク（約2%）、一般ガイド（約21%）、定点ガイド（4か所）（約63%）、小学生対象（14%）であることから、前年度とあまりその数字は変わらないことがわかる。

- (14) 静岡市経済局商工部観光・シティプロモーション課興津氏への聞き取り(2013年8月27日および10月17日)より。
- (15) インターネット上の「とらべりんぐ」というブログには、2013年1月21日、静岡市清水区興津生涯学習交流館で開催された「清水区観光ボランティア養成講座」には、静岡市以外(浜松市、袋井市、焼津市など)からの受講者もあったことが載せられている(ブログ公開は2013年1月22日、<http://309uni.blog134.fc2.com/blog-entry-103.html>)。
- (16) 「駿府ウェイブ」のホームページ「駿府ウェイブの紹介」において、「平成23年8月23日8月会員座学」では、「富士山世界遺産登録について」として、座学研修(講師は「富士山世界文化遺産登録推進両県(山梨・静岡)県民会議」静岡事務局静岡県文化・観光部世界遺産推進課主査)が行われたことが載っている(http://www1.mm22.jp/sumpu/arc/9_/2013.09.22)。
- (17) 「全国観光ボランティアガイド」「報告書」「観光ボランティアガイド人材養成研修の開催」に、「平成24年度さいかいガイドの会(長崎県)」に関する資料(http://www.nihon-kankou.or.jp/vg/pdf/h24_saikaiguide.pdf)が掲載されていたことから、筆者は「さいかいガイドの会」の北島氏からガイド研修で使用している教材(「さいかいガイドの会「始めます!西海型まち歩き観光「まち歩き観光ガイド養成講座」Part1[観光ガイドと地域活性化]」を入手した。「全国観光ボランティアガイド」における同団体の紹介では、同団体のガイド料金は「500円/お客様1人につき」となっている。
- (18) 内閣府 NPO ホームページ「特定非営利活動法人の活動分野について」(平成25年3月31日現在)には、「観光の振興を図る活動」は改正特定非営利活動促進法施行日(平成24年4月1日)以降に申請して認証された分のみが対象、となっている(<https://www.npo-homepage.go.jp/pdf/bunyaichiran.pdf>)。
- (19) 調査方法は、同団体事務局長三宅氏に対する聞き取りである。
- (20) 行政単位として「奥浜名湖エリア」は無いが、2007年における浜松市への合併前における引佐町、三ヶ日町、細江町の3町で、現在の引佐地区、三ヶ日地区、細江地区の3地区が奥浜名湖エリアと考えられている。
- (21) この分野は同団体の法人申請時には分野項目になかった。
- (22) 「奥浜名湖観光まちづくりねっと」ホームページ「奥浜名湖観光まちづくりねっと定款」より(<http://okuhamanet.com/about/teikan/>)。
- (23) 同団体事務局長三宅氏による表現。
- (24) たとえば、京都府木津川市「NPO 法人ふるさ

と案内・かも」による「地域を守り、地域を伝える」活動(寺村 2009:4)など。

- (25) 出典は註(3)と同じ。「住民とのかかわりについて」は、「地域資源に対する住民たちの間に存在するずれ」に対する指摘がみられ、「あまりに日常的なせい、関心が薄い、幾つもの町村が合併することで、住民自身の中に意識のずれがあるのではないか、その解決策として、住民にとにかく遺産の意義を認知してもらうことが大事、関心をもってもらわなければならない」という意見が掲載されている(「平成22年度渋川伊香保大会」)。また、「地域資源の保全と活用」では、「資源を守るための取り組み」として「文化財保護レスキュー隊」を作っている(加賀あいらすガイド)などがある。さらに、「東広島町は東広島を中心に近隣の5町が合併してできた町で、山から海まであり、なかなか共通点が見当たらないことから、合併の前から1市5町を知ってもらうために、順番に巡るツアーを企画して、それぞれの町の良さを発見してもらう……(中略)……少しずつみんながつながっていくという形をとっている」とある(「平成22年度渋川伊香保大会」)。
- (26) 筆者が参加した兵庫県加西市の「加西市歴史街道ボランティアガイド」によるガイドツアーでは、案内場所に対するガイドの個人的な関わりについての話を聞いた。また、同ガイドから聞いたところでは、ガイドが同じでも、住民が個人宅の中をみせてくれるときとそうではないときがある、という。
- (27) 足助町観光協会発行の『足助 地域文化創造の50年』には、「ボランティアガイドは観光資源のひとつ」(p.45)という表現がある。
- (28) IV章で取り上げた「さいかいガイドの会」会長へのインタビュー記事には、「観光客に魅力を伝え、リピーターにつなげ交流人口を拡大したい」という同会会長の発言が載せられている(長崎新聞2013年9月27日「あの人この人」「宝の島」の魅力伝える)。

参考文献

- 小林甲一 2009「持続可能な地域社会づくりに関する一考察」名古屋学院大学社会科学編第45巻第4号 pp.1-12.
- 寺村安道 2009「地域観光と地域振興 ―観光ボランティアガイド組織の活動事例から観光まちづくりを考える―」RPSPP Discussion Paper No. 12. pp.1-15.
- 土肥健夫 2008『地域資源活用マニュアル』同友館。
- 森岡清志編著 2008『地域の社会学』有斐閣。
- 林懿綱・東秀紀・岡村祐 2012「横浜市の観光ボランティアガイド組織に関する研究：その育成方法

(14) 地域資源と「観光ボランティアガイド」の関係性に関する一考察

を中心にして」『観光科学研究』(5) pp. 95-106. 首都大学東京機関リポジトリ。
藤井正 2008 「「地域」という考え方」藤井正他編著『地域政策入門』ミネルヴァ書房 pp. 10-20.
安村克己 2006 『観光まちづくりの力学—観光と地域の社会学的研究—』学文社。
安福恵美子 2012 「観光という場が生み出すダイナミズム」『年報・中部の経済と社会 2012年度版特集・地域創造としての観光』愛知大学中部地方産業研究所 pp. 3-14.

参考資料

足助町観光協会『足助 地域文化創造の50年』(足助町観光協会創立50周年記念誌) 2005年4月。
文部科学省科学技術・学術審議会、資源調査分科会第28回会議(平成23年3月7日開催)配布資料の一部(「地域資源の活用を通じたゆたかなくにつくりについて」(資料11)(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu3/shiryo/1303081.htm)。
静岡新聞「市観光行政の一助に」2008年7月4日(地域版)。
さいかいガイドの会「始めます!西海型まち歩き観光 「まち歩き観光ガイド養成講座」Part1 [観光ガイドと地域活性化]」。

社団法人日本観光協会『地域紹介観光ボランティアガイド運営活動マニュアル』1999年。
社団法人日本観光協会『地域紹介観光ボランティアガイド活動の手引き』1999年。
公益社団法人日本観光振興協会「観光ボランティアガイド組織の現況」(2013年1月～3月調査)(http://www.nihon-kankou.or.jp/vg/pdf/h24_houkoku.pdf)。
NPO 法人奥浜名湖まちづくりねっと「「NPO 法人奥浜名湖まちづくりねっと」の紹介」(2013年7月19日)。
NPO 法人奥浜名湖まちづくりねっとホームページ「奥浜名湖観光まちづくりねっと定款」(<http://okuhamanet.com/about/teikan/>)。
静岡案内人・駿府ウェイブ『10周年の歩みと回顧』[創立10周年記念誌] 2008年6月10日。

謝辞

本稿執筆にあたりご協力いただいた「駿府ウェイブ」会長川崎勝彦氏、静岡市経済局商工部観光・シティプロモーション課興津昌利氏、「さいかいガイドの会」北島淳朗氏、そして「NPO 法人奥浜名湖観光まちづくりねっと」事務局長三宅淳子氏に厚くお礼を申し上げる。